

LIBRARY



季節は秋から冬へと変わります。夜空が綺麗な時期でもありますね。日本の古典には、月に関する記述がものすごく多いので、天文関係の科学者のお役に立っていると阿部先生から聞きました。日本人の感性の豊かさ、詳細な記録を残す習性、紙と墨の文化のおかげ？

『人魚が逃げた』 青山美智子著 PHP 研究所 2024



銀座の真ん中で、生放送のテレビレポーターにあなたは誰？と声をかけられ美青年は言った「王子です。」なぜここに？「僕の人魚がいなくなっちゃって…。逃げたんだ。この場所に」。これはフェイク？撮影？たちまち画像はSNSで拡散されていく。その時、たまたま銀座にいた5人の人物たちのショートストーリー。表紙のミニチュアは、もちろん田中達也氏。そして物語のなかにまで登場！

『呼人は旅をする』 長谷川まりる著 偕成社 2024



「呼人」とは、何かを寄せてしまう人のこと。そのため、一ヶ所に10日以上留まることができない。あかりのクラスメートの紫雨は、雨の「呼人」だとわかり、以来あちこち旅をして暮らす。でも最後の遠足ぐらいクラスメートと行きたい。担任の先生が行き先を人気のアスレチックから博物館に変更するとみんなは大ブーイング。あかりも率先して抗議。ところが紫雨が現れると急にみんなはいい子ちゃんになった。納得できないあかりの口から、暴言が飛び出して…。

『雫』 寺地はるな著 NHK 出版 2024



「ジュエリータカミネ」で20年間、リフォームデザイナーとして働いてきた長瀬珠。中学の同級生である社長の高峰能見から、ビルの取り壊しに伴い、会社を閉じることを告げられたのは半年前。最初は反対した珠も、納得して最後の日を迎えた。がらんとしたオフィスに、中学の同級生である森侑、木下しずくが現れた。中学の卒業制作で出会った4人は、恋人とも親友とも異なる関係のまま、30年という歳月が流れた。今再びその関係は…。

『藍を継ぐ海』 伊予原新著 角川書店 2024



著者は、子どもの頃から大の本好き。中学生の頃はマンガ家志望。神戸大学理学部を卒業した後、東京大学大学院理学系研究科で地球惑星科学を専攻。卒業後は富山大学で働いていたけれど、環境の変化もあり研究者としてのモチベーションが下がってきたときに、たまたま書いた小説が江戸川乱歩賞の最終候補に残り、同じ年に『お台場アイランドベイビー』で作家デビュー。やはり研究者と二足のわらじは無理と、作家として独り立ち。以来、数々の作品を書き、いまや広い世代から支持を集めているんですよ。作品には、自身の経歴を生かし、科学的な知見や科学の美しさが盛り込まれているが、敬愛する人物に星野道夫氏をあげていることから、科学礼賛ではなく、もっと深いところで伝えたいものがある作家さんなのです。中学生にも読んでほしい作品がたくさん！

『お城の人々』 J.エイキン著 東京創元社 2023



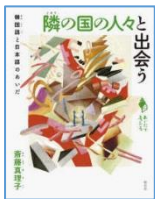
イギリスの作家、エイキンの珠玉の短編を10作品集録。『ルビーが詰まった脚』の続編。ある日5歳の少女サンディに海辺で会ったシェパード犬ロブは、どうしてもサンディと暮らしたいと、飼い主のもとから2度も逃げ出し650キロも歩いてサンディのもとに。ロブとの生活が9年を過ぎたある日、サンディは坂を猛烈な勢いで下ってきたトラックにロブとともに巻き込まれる。昏睡から覚めないサンディにアリエナイ奇蹟が！（「ロブの飼い主」）

『この父ありて一娘たちの歲月』 梯久美子著 文藝春秋



9人の女性作家たちの父をめぐる物語（実話）。優れたノンフィクション作家である著者の手にかかる、父と娘の複雑な関係が浮かび上がり、よくも悪くも大きな存在だった父を乗り越え、不朽の名作を生み出した、娘たちが蘇る。彼女たちは書くことで強くなったに違いない。渡辺和子、石垣りん、茨木のり子、石牟礼道子、萩原葉子、田辺聖子…。きっとどこかで出会う人たちです。

『隣の国の人々と出会う』 齊藤真理子著 創元社 2024



“あいだで考える”シリーズの1冊。齊藤さんの場合、韓国語と日本語のあいだで翻訳の仕事をしている。大学で韓国語の勉強を始めた1982年は、日本人が韓国のスターに熱狂するなんて絶対にありえないと思っていたそうだ。齊藤さんは言う。今ほど韓国と日本という二つの文化、二つの言語が歩み寄った時代はないと。一方でこれほど露骨な敵意や憎悪が在日コリアンや隣国に直接的に向けられる時代もない。これほどはっきりした「愛」と「憎」が同時にある時代こそ、足元をしっかりと見なければと著者の忠告。

『ラトヴィアの図書館』 吉田右子著 秀和システム 2024



かつての独立国ラトヴィアは、1940年ソ連に併合され、再び独立を果たしたのは1990年のこと。以後、ラトヴィアの文化を担う公的機関としての図書館は、発展を遂げてきた。日本の6分の1の広さで、人口200万のラトヴィアだが、人口あたりで比較すると、ラトヴィアは2500人に対し1館、日本は36,000人に対し1館と雲泥の差！そしてその図書館が本気で様々なサービスを展開！

『勉強の価値』 森博嗣著 幻冬舎新書 2020



著者の森さんは、「勉強は楽しくない」とこの本で断言している。また、森さんは、人に勝つことに価値を見出さず、人は自由であるべきだという信念を持っている。嫌な思いをしてまで、人生の大切な時間を「勉強」に捧げる必要が本当にあるのかと子ども時代も思っていた。が。そんな森さんが、今は「勉強はしたほうがいい」という結論に至った。なぜなら、勉強の価値に気づいたからだ。そして本当の勉強はとんでもなく楽しいことにまで気づいてしまったらしい。気になった人は読んでみてね。皮肉なことに、今は勉強に専念するために、読む暇がないかもしれませんが…。

11月にはいった本の一部です。リクエストは常時受け付けています。

登録番号	NDC	書名	著者名1	出版者
040130	069	ミュージアムと生きていく	大澤夏美	文学通信
040119	150	SF マンガで倫理学	萬屋博喜 著	さくら舎
040125	480	野生生物は「やさしさ」だけで守れるか?	朝日新聞取材チーム	岩波書店
040108	518	うんちの行方	神館和典	新潮社
040109	597	中高生のための「かたづけ」の本	杉田明子	岩波書店
040110	673	ハンバーガーとは何か?	白根智彦 著	グラフィック社
040122	702	美術の物語	ゴンブリッチ 著	河出書房新社
040126	813	にゃんこ四字熟語辞典	西川清史	飛鳥新社
040084	902	数学を愛した作家たち	片野善一郎 著	新潮社
040128	910	スマホ片手に文学入門	小池陽慈	笠間書院
040134	913	サマーゴースト	乙一 著	集英社
040135	々	一ノ瀬ユウナが浮いている	乙一	集英社
040104	々	N	道尾秀介 著	集英社
040112	々	千ポロ	菅野雪虫	講談社
040098	々	屈辱ポンチ	町田康 著	文藝春秋
040138	々	人魚が逃げた	青山美智子	PHP 研究所
040105	929	すべての、白いものたちの	ハンガン	河出書房新社
040149	933	オリシャ戦記	トミ・アデイェミ 著	静山社
040106	936	アウシュヴィッツの小さな厩番	H・オースター他	新潮社

12月のブックカフェのおしらせ

12月13日(金) 15:00～ テーマは「はにわ」

いろいろ、好きなモノがある国語科の阿部先生ですが、今回は「はにわ」について熱く語ってくれる予定です。東京国立博物館で開催されている挂甲の武人 国宝指定50周年記念 特別展「はにわ」も12月8日で終了です。見られなかった～残念!と思った人は、ぜひブックカフェに。もちろん見たよ～という人も。



今年度最初の映画鑑賞会 開催

12月6日(金) 15:00～ 『鏡の孤城』をみんなで見ませんか?

渡邊先生のテーマ研から、寄贈いただいた『鏡の孤城』、実は1年生図書委員会で上映したかった映画だったのです。当日は、辻村深月さんの著書を一堂に並べてお待ちしております。



図書委員会企画はこれからもいろいろ

後期が始まって、テーマ発表会や長瀬学習、そして期末テストと忙しい生徒の皆さんなので、なかなかイベントもできず。そこで、1,2年生図書委員+有志で、ゲリラブックカフェをやってみました。テーマは、「芸術」です。校長先生が、芸術の閉会式で「芸術作品は、1人で味わうより、誰かと一緒に味わうというのでは?」という言葉覚えていませんか?そこで、はたして芸術



は人と分かち合うとより感動があるのかを最初の話題にして、お茶を飲みながら、芸術談義。最後は本棚から自分が芸術だと思ふ本を持ち寄って紹介して終わりました。なかなか面白かったです。

←現在図書委員は週がわりで、お薦めの本をホワイトボードに展示しています。良かったら手に取ってみてください。



こんなことやってます!



77回生 国語 描写で選ぶこの1冊



2年生が返却した本を並べています。葉がわりの短冊には、選んだ描写が書いてあります。友達が紹介した本で読みたいなと思った本もあるのでは?ぜひ冬休みの読書にどうぞ!

76回生 国語 おくの細道レポート



文学作品に描かれる地域制・文化・風習を「読む」という課題に取り組んでいた3年生。用意した本だけでなく、本棚から自分で使いそうな本を探していた姿が印象的でした。

追悼! 谷川俊太郎さん



大切な人の訃報が続く10月、11月でした。92歳で亡くなられた谷川俊太郎さんは、たくさんの詩を私たちに残してくれました。きっと、気づかないで耳にしたり、目にしたり、歌ったりしている作品が沢山あると思います。子どもの頃学校が嫌いだった谷川さんは大人になって、あちこちの学校に呼ばれることに、ある感慨をお持ちだったようですが…。合掌。